

中学部の研究

集団活動の中で、

よさやもてる力を発揮する

生徒を目指した授業づくり

— 体育における学習環境と教師の働き掛けの在り方 —

目 次

1	学部研究テーマについて	59
(1)	前次研究の成果と課題	59
(2)	中学部の教育目標と教育方針	60
(3)	中学部の教育的ニーズ	60
(4)	体育での取組について	61
(5)	今次研究での取組	61
2	研究目的	62
3	研究仮説	62
4	研究内容	62
5	研究方法	62
6	実 際	64
	研究内容1 客観的なデータに基づく生徒の実態把握から運動に関するよさやもてる力、課題を明確にし、外部の専門的な助言を生かした授業づくりを考える。	64
	研究内容2 集団活動の中で、一人一人の生徒がよさやもてる力を発揮できる学習環境や教師の働き掛けを明らかにする。	72
	研究内容3 生徒がよさやもてる力を発揮できる有効な学習環境や教師の働き掛けを、様々な場面に応用する取組を探る。	79
7	まとめと今後の課題	88

集団活動の中で、よさやもてる力を発揮する生徒を目指した授業づくり — 体育における学習環境と教師の働き掛けの在り方 —

1 学部研究テーマについて

(1) 前次研究の成果と課題

① 前次研究の概要

前次学部研究において、わたしたちは運動に関する教育的ニーズが高いことに視点を当てた。そして、体育の授業における専門性をより高め、生徒の運動機会を拡大し、生徒が学校とは違う場所で活動しやすくするために様々な人と連携した取組を行ってきた。

具体的には、生徒の運動に関する実態把握や体育指導の在り方についてK大学教育学部保健体育科から専門的な助言を受けたり、保護者、大学生ボランティア、教師が協力して放課後のスポーツ活動(附養スポーツクラブ：以下FSCと表記する)を展開したり、生徒が実際に通っているスポーツ講座との情報交換や指導員の授業参加の交流等を行ったりした。

② 成果について

わたしたちは、日常の行動観察やムーブメントスキルテストバッテリー(以下MSTB)を通して、生徒の目と手の協応、平衡性、筋力などの運動技能を構成する因子を客観的に評価し、一人一人に必要な運動課題をより明確にすることができた。また、体育指導の在り方について、運動技能を上げていくための運動学習の観点を取り入れることで、体育指導の基本的な考え方を見直すとともに、運動技能を高めるための個人目標、指導内容、指導方法の設定を変えることができた。

次に、生徒の授業以外での定期的な運動の機会の拡大を目指して、保護者、大学生ボランティアとともに週1回のFSCを設立した。その中で、ふうせんバレーボールのグループは、余暇活動の充実につながる休日の大会に参加するようになってきた。

最後に生徒が取り組んでいるスポーツ講座との連携から、わたしたちは、それぞれの立場を踏まえるとともに生徒への働き掛けを共通理解し、統一することで、生徒により活動しやすい環境を提供することができた。このように関係機関とつなぐことで、支援を共有することの重要性が見えてきた。

③ 課題について

わたしたちは、運動に関する一人一人の実態を分析し、運動の課題やよさやもてる力を明らかにしたが、実際の活動場面に生かすということについては十分に検討することができなかった。また、学部の教師が効率的に共通理解したり、検討したりするための工夫を行い、授業づくりの精度を高めていく必要があると考え、生徒自身が力を発揮するための教師の手立ての工夫も必要であると考えた。

次に、活動の場所が広がってきたことで戸惑っている様子や生徒がある特定場面ではできることを他の場面において十分に発揮しきれない様子が見られた。それは、環境や働き掛けが変わったことが大きな理由であると考え、授業づくりにおいて学習環境、教師の働き掛けを具体化することが必要であると考えた。

さらに、生徒が授業だけでなく、様々な生活場面でよさやもてる力を発揮するために、授業づくりにおいて具体化した学習環境や教師の働き掛けを、効率的に様々な場面や関係機関へつないで共有していくための工夫が必要であると考えた。

(2) 中学部の教育目標と教育方針

中学部段階の生徒たちは、一人一人の生活環境に応じて、それぞれに興味・関心の対象や行動範囲が個別的なものから、より社会的なものへと移行しつつある時期であり、学級、学校などの様々な集団の中で人間的な成長を遂げるのによい時期でもある。そこで中学部では『すこやかな心と体をもち、実際の生活に生かすことのできる基礎的・基本的な内容を進んで身に付け、共に力を合わせながら、実践的・主体的に活動しようとする生徒を育成する』ことを目指している。

わたしたちは、教育的ニーズを踏まえた個別の教育支援計画の策定及び個別の指導計画の作成を行い、体験的学習活動、生徒一人一人が見通しをもった主体的な取組、集団活動、特性や個性に応じた支援を重視した日々の実践に取り組んでいる。

(3) 中学部の教育的ニーズ

① 生徒の様子

生徒の多くは、様々な活動に対して興味・関心や意欲があり、実践的・主体的に活動する力を日々の活動の中で着実に身に付けてきている。

日ごろの生徒の様子を見ると、授業中は、一人一人に応じた必要な支援を受け、積極的に挙手して発表するなど見通しをもって意欲的に学習している。休み時間には、パソコン等をして自分なりに楽しんでいる生徒がいる一方、友達同士で外へ出て、ボールをけったり、キャッチボールや追い掛けっこをしたりして楽しんでいる生徒が増えてきている。

また、生徒の中には、かかわる人や活動の場所が変わったり、集団で一緒に活動したり、協力分担したりする際に、個人活動では発揮できることが難しくなり、戸惑っている生徒も見られる。このことは、かかわる人の対応が違っていたり、活動の環境が生徒によって分かりづらかったり、集団におけるルールや状況理解が難しかったりすることが原因であると考えられる。

活発に動く一方で、ぎこちなさ、緩慢さ、可動域の狭さ、バリエーションの少なさなどの状態が多くの子に見られる。多くの生徒は肥満または痩身の状態にあり、体力面で疲れやすいところも見られるため、健康、安全、体力の面から多くの配慮が必要である。

② 保護者の思いや願い

保護者のだれもが、毎日を楽しんで充実した生活を生徒に送ってほしいと願っている。その中でも、将来の生活に向け、生徒の活動の場が広がり、余暇活動が充実してほしいとの思いがあり、健康、体力の面から、体を動かすことのできる余暇活動が充実することを願っている。前次研究の取組から現在学校外の場所で、生徒たちが活動する場が少しずつ広がってきており、保護者や教師以外の方が生徒にかかわることも増えてきている。余暇活動の充実の願いに加え、新しい活動場所において生徒が決まりやルールを守ってみんなと一緒に活動してほしいという保護者の願いも高まってきている。

③ 教師の思いや願い

わたしたちは、これまでの授業実践から、生徒のよさやもてる力を明らかにし、一人一人に応じた手立てを考えてきた。現在、生徒の活動の場が広がり、様々な人とのかかわりが増えてきつつある。そして生徒に関係のある関係機関や家庭との連携の方法についても明らかになってきている。このような状況においてわたしたちは、社会参加を目指す際に大切な集団活動や自閉症特有の人とのかかわり面での課題などといった障害特性を踏まえた手立てを明らかにしていき、さらに明らかになった手立てを様々な人と共有していくことが今後の重要な視点と考える。

以上を踏まえ、集約した中学部の教育的ニーズを以下のように考えた。

【中学部の教育的ニーズ】

様々な場面において、ルールを守り、みんなと一緒に体を使って楽しく活動することができる。

(4) 体育での取組について

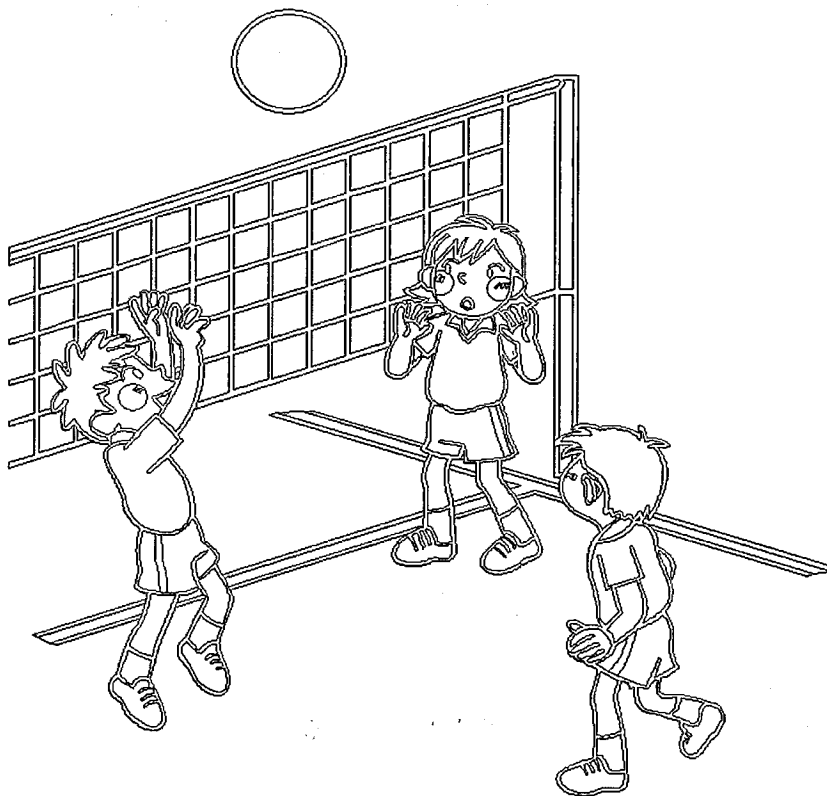
学習指導要領において、体育の目標、意義は、「身体活動という具体的な学習活動を通して運動能力を伸ばし、情緒の安定を図り、社会性を豊かにし、健康で安全な生活を営むための力を育むことである。」「運動の実践は、運動技能を高めるばかりでなく、生活への積極的な態度も養い、望ましい人間関係を築くことになる。また、体育指導によって身に付けた力は、健康・安全で自律的な生活を営む習慣形成につながるものである」と述べられている。体育指導は、生徒の全面的発達を図る上でとても有効な手段として考えられる。

本校中学部の体育では、生徒の実態を踏まえ、楽しんで取り組むことができることをねらいの柱として取り組んできている。体育は、他の教科と比べ、身体活動などの具体的な活動が多く盛り込まれ、中学部のニーズとしてある、体を使った活動を最も展開しやすいものである。また、授業で取り組んだことが、休み時間等においても取り組みやすく、生活場面に広げやすいものである。全身運動による身体感覚への刺激を受けることに加え、周囲の生徒や教師の動き、教材・教具、音楽などの多くの刺激を手掛かりとして活動に取り組むことが特色としてあり、集団活動での学習環境や働き掛けのアプローチが考えやすいものである。

以上の教科としての特色や前次研究の体育における成果と課題を踏まえ、わたしたちは、中学部の教育目標と教育的ニーズを達成するとともに、集団活動における手立て、そして生活場面へ広げていくための方法を探るために、体育の授業づくりを手掛かりにしていきたいと考えた。

(5) 今次研究での取組

そこで今次研究では、前次研究での運動に関するニーズの高さから取り組んできた体育の授業づくりを通して、一人一人の生徒のよさやもてる力を様々な集団活動の場で発揮できるようにしていきたいと考える。専門家の助言から得られた専門的な観点を授業の中に生かすために、個人の実態の把握や分析から指導内容、方法においてより具体化していくこととした。そして、授業の中で生徒が意欲的、主体的に取り組むことができる手立てを学習環境と教師の働き掛けの観点から考えていくこととした。さらに、体育の授業にとどまらず生徒が様々な場面で力を発揮できるように、得られた有効な手立てを応用していく手段についても考えていくこととした。



2 研究目的

体育での集団活動の中で、生徒が自分のよさやもてる力を発揮する学習環境や教師の働き掛けを明らかにし、様々な集団活動の中でも、生徒が自分のよさやもてる力を発揮するための有効な方法を考察する。

3 研究仮説

- (1) 体育の授業づくりにおいて、専門理論や客観的なデータを生かすことで、一人一人のよさやもてる力、課題を明確にできる。
- (2) 一人一人に応じた具体的な学習環境や教師の働き掛けを実践することで、集団活動を配慮した体育の授業においてよさやもてる力を発揮することができる。
- (3) 有効な学習環境や教師の働き掛けを教師間で共有し、様々な場面に応用する取組を探ることで、様々な場においてよさやもてる力を発揮することができる。

4 研究内容

研究内容 1 客観的なデータに基づく生徒の実態把握から運動に関するよさやもてる力、課題を明確にし、外部の専門的な助言を生かした授業づくりを考える。

研究内容 2 集団活動の中で、一人一人の生徒がよさやもてる力を発揮できる学習環境や教師の働き掛けを明らかにする。

研究内容 3 生徒がよさやもてる力を発揮できる有効な学習環境や教師の働き掛けを、様々な場面に応用する取組を探る。

5 研究方法

- (1) 対象
本校中学部生徒 18 名を対象とした指導について考える。
- (2) 指導の形態
集団活動を配慮した保健体育の指導の形態で行う。
- (3) 実施する題材、期間
実施する題材、期間については以下に示すとおりである。
 - ① 「朝の運動」(H 18.6～H 19.3)
 - ② 「水泳」(H 18.6～9)

- ③「グランドテニス」(H 18.9～10)
- ④「附養フットベースボール」(H 18.11～H 19.1)
- ⑤「風船バレーボール」(H 19.1～H 19.2)

(4) 体育授業づくりについて

まず、外部の専門的な助言を生かし、実態のとらえ方から指導の在り方、活動内容、題材配列等の指導計画についても整理、精選し、P-D-C-Aサイクルを踏まえた授業づくりを明らかにする。また、授業づくりをする上で、資料等の有効な道具についても検討する。次に、その授業づくりにおいて、教師間で授業ミーティングを行い、授業VTRを活用し、生徒の実態把握や有効な学習環境、教師の働き掛けについて明らかにする。そして、有効であった学習環境や教師の働き掛けについて、放課後のFSCでの活動に応用するとともに、その応用方法について考える。

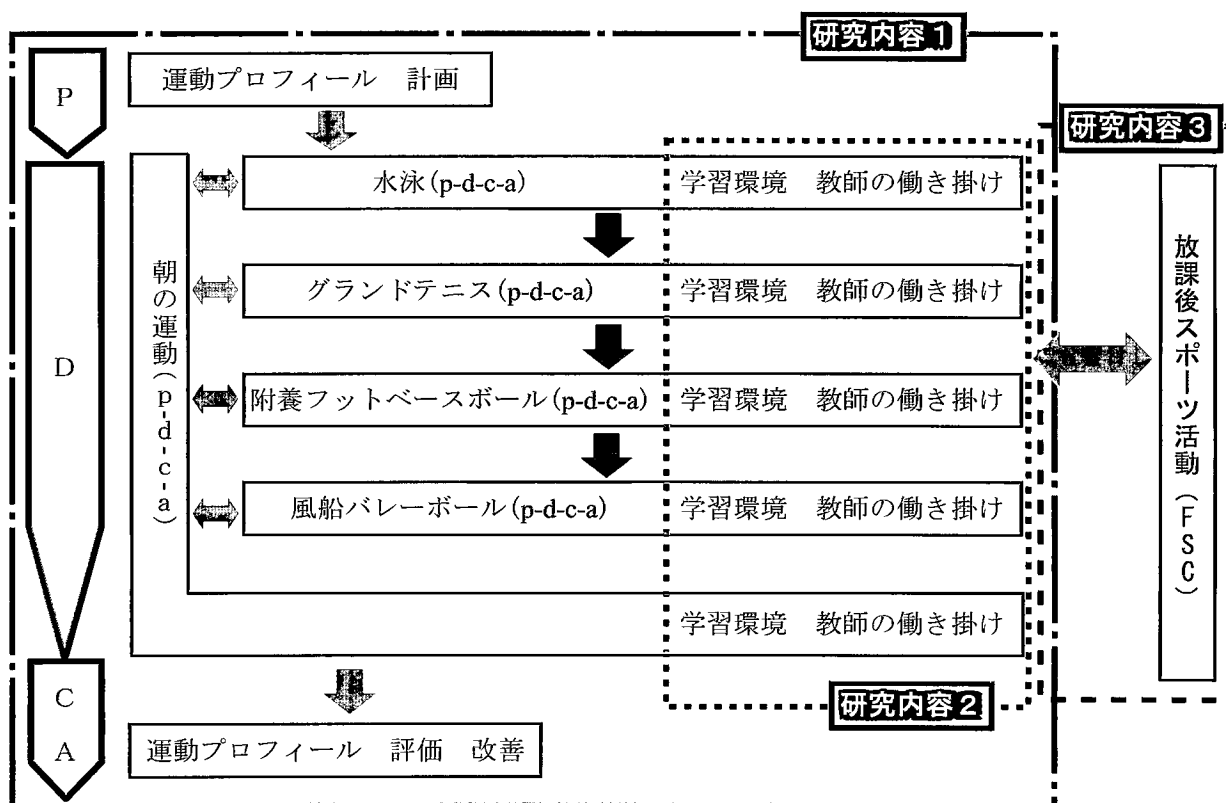


図1 P-D-C-Aサイクルを踏まえた体育の授業づくり

題材について

【グランドテニス】

手作りの木製ラケット、直径15～20cmの発泡スチロールボールを用いて、床を転がってくるボールを打ち合ったり、ゴールに入れたりする。

【附養フットベースボール】

フットベースボールのルールを基本とし、生徒の実態に応じた本校ルールに改正した。ソフトバレーボールを用いる。1チーム9人とする。

【風船バレーボール】

ふうせんバレーボールのルールを基本とし、生徒の実態に応じた本校ルールに改正した。1チーム3人とする。

6 実 際

研究内容 1 客観的なデータに基づく生徒の実態把握から運動に関するよさやもてる力、課題を明確にし、外部の専門的な助言を生かした授業づくりを考える。

(1) 運動ができることの楽しさ～運動学習の導入～

生徒の教育的ニーズに応じていくために、専門家からの情報を取り入れることはとても重要なことと受け止め、前次研究では、生徒の教育的ニーズを専門家と共有し、スポーツテストの結果やVTR、実際の授業参観を通して、運動に関する生徒の実態や体育指導についての助言を受けた。

本校中学部の生徒は、体を動かすことへの興味・関心は高く、意欲的に参加する様子が見られるが、運動技能面において、どのように体を動かしてよいかということについての理解が難しかったり、自分から動きを発展させて新しい動きを獲得することに難しさがあつたりする。このことは、生徒たちが活動の楽しさを十分に享受できなかつたり、もっている力を発揮できなかつたり、さらに余暇活動等において自分から運動に取り組もうとしなかつたりすることにつながっていると思われる。そこで、中学部では運動技能の向上を目的とした運動学習の理論を体育指導の中に導入することにした。

(2) 運動学習について

以下に運動学習について専門家の所見等に基づき、整理したものを示す。

- ・ 運動学習とは、既に獲得した運動経験を「変形、統合」することで形成されるものである。
- ・ 現時点で何が獲得され、何が獲得されていないかを表す「運動履歴」を確認することが、運動課題を設定する上で不可欠である。
- ・ 新しい運動課題（「できない」こと）に対し、「動かない体」をもっていることは障害の有無にかかわらず、共通しているので、障害のある子どもにも一般的なセオリーが適応できる。
- ・ 獲得された運動経験には、必ず「できるに当たった運動感覚(キネステーズ)」がついてくる。「見た動きをまねたいという〈原衝動〉が起こること」によって模倣が始まる。この原衝動によって模倣がうまくできたときに「動ける身体」を獲得したことになり、運動感覚(キネステーズ)をも獲得したことになる。運動経験を変形・統合させるためには、運動感覚を変形・統合させる必要があり、指導者は、学習者の新しい運動感覚の発生を発生論的立場に立って援助する必要がある。
- ・ 生徒が課題を理解しているのか、意欲はあるのか、技術的にできないのかを見極めることが必要である。
- ・ 指導に当たっては、「目的（運動課題）」、「内容（指導内容）」、「方法（目的、内容を達成する妥当な指導方法）」を検討する必要がある。
- ・ 指導する者は、その運動を成す「運動構造」を理解しなければならない。
- ・ 「運動類縁性・運動類似性」を理解することで生徒が現在できる運動を「変形」し、課題解決を図ることが期待できる。
- ・ 教師は、生徒の運動学習の過程を支援し、発達を促すことが大切である。

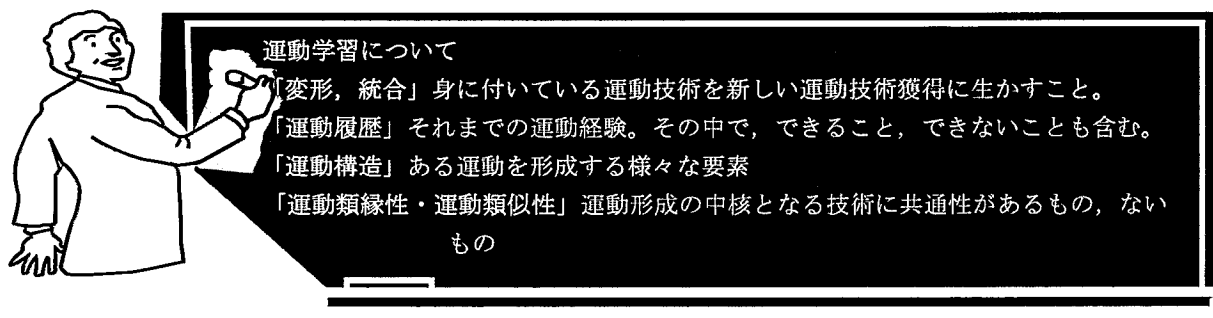


図2 運動学習について

(3) 中学部体育の変更

わたしたちは、運動学習の理論を取り入れ、中学部体育の基本的な考え方について、以下のような変更を行った。生徒の取り組みやすさや興味・関心から体力の向上を中心に考えてきた以前の考え方から、一人一人の動きに視点を当て、実態をとらえ、適切な運動プログラム、運動技能の向上を図ることで体力や意欲の向上を目指した考え方へ変更を行った。

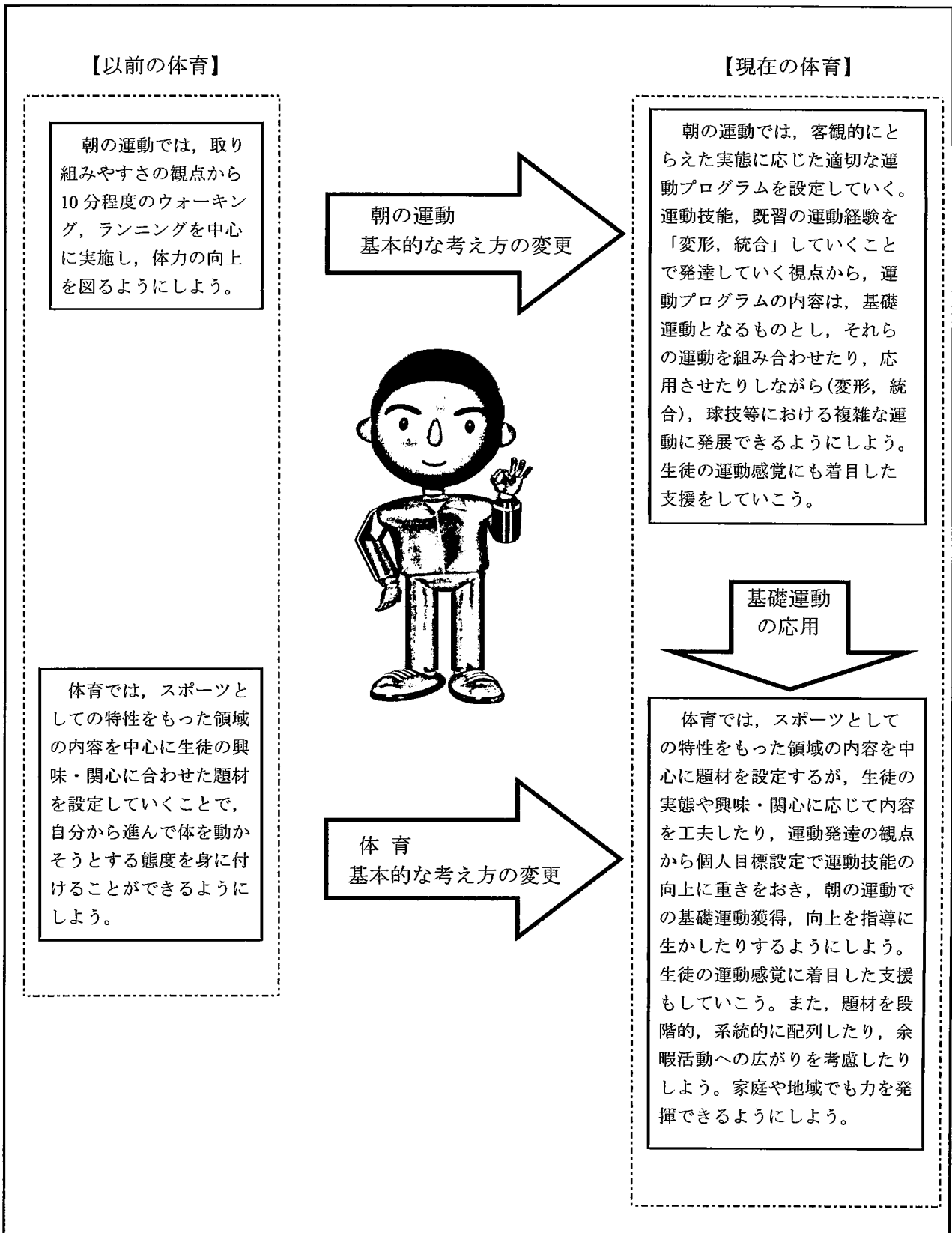


図3 基本的な考え方の変更

(4) 運動課題の把握 —ムーブメントスキルテストバッテリー(MSTB)の実施—

運動の発達はいくまでの運動経験を変形・統合させることで、形成されていくという考えに基づき、生徒の動きや運動を形成する要素について客観的にアセスメントをとることが重要と考えた。そこで、日常生活での行動観察に加え、MSTBを導入した。

MSTBにより、次のことが明らかになってくるのではないかと考えた。

MSTBによって・・・

- ※ 運動能力の実態把握の一つであるMSTBを活用して運動能力の傾向を把握し、一人一人に応じた運動能力の育成の仕方を明らかにすることができるのではないかと考えた。
- ※ 生徒一人一人の運動能力に対するよさやもてる力の把握ができ、生徒一人一人の運動能力の育成を図ることができる授業づくりができるのではないかと考えた。

表1 MSTBについて

	テ ス ト	テ ス ト 内 容	運 動 属 性
微 細 運 動	ビーズの糸通し	ビーズを糸に通す	目と手の協応
	握りこぶし・へり・ひら手	片側の手を使い、連続した動きを繰り返す	目と手の協応
	積み木うつし	片側の手を使い体の中心線を交差し、積み木を型にはめていく	目と手の協応
粗 大 運 動	お手玉投げ	的をねらってお手玉を投げる	視覚によるムーブメント
	座位／前屈／リーチ	脚を伸ばし座り、体を前に曲げる	柔軟性
	立ち幅跳び	立位から遠くへ飛ぶ	筋力(脚力)
	往復走	ある場所から別の場所へ素早くお手玉を運ぶ	筋力・敏しょう性
	体の位置変換	立位から腹ばい、腹ばいから立位を速く繰り返す	筋力・敏しょう性
	起き上がり	ひざを曲げ、仰向けの状態から体を起こす	筋力(腹筋)
	歩行板	かかととつま先をつけて板の上を歩く	平衡性(動的バランス)
	片足バランス	片足を上げて立つ	平衡性(静的バランス)
	いすでの腕立て伏せ	いすにつかまり斜めに腕立て伏せを行う	筋力(腕・肩の筋力)

(5) 題材配列の変更

生徒の運動経験や運動に関するよさやもてる力を把握した上で、運動技能が系統的、段階的に習得できるように題材配列の変更を行った。また、集団活動の観点からも個別的な題材から集団的な題材になるように配列の変更を行った。両方の観点における検討の結果、ボールの移動空間が三次元(空中)であることから風船バレーボールが最も難易度が高いと学部内で共通理解を図ることができた。また、相手への攻撃だけでなく、集団活動の観点からも味方へパスする必要がある風船バレーボールが最も複雑であると学部内で共通理解を図ることができた。「サッカー」については、生徒の実態からPK合戦的な内容のものであったが、ルール理解、チームプレーの要素がより高くなっていくと考えられる「附養フットベースボール」へ変更した。

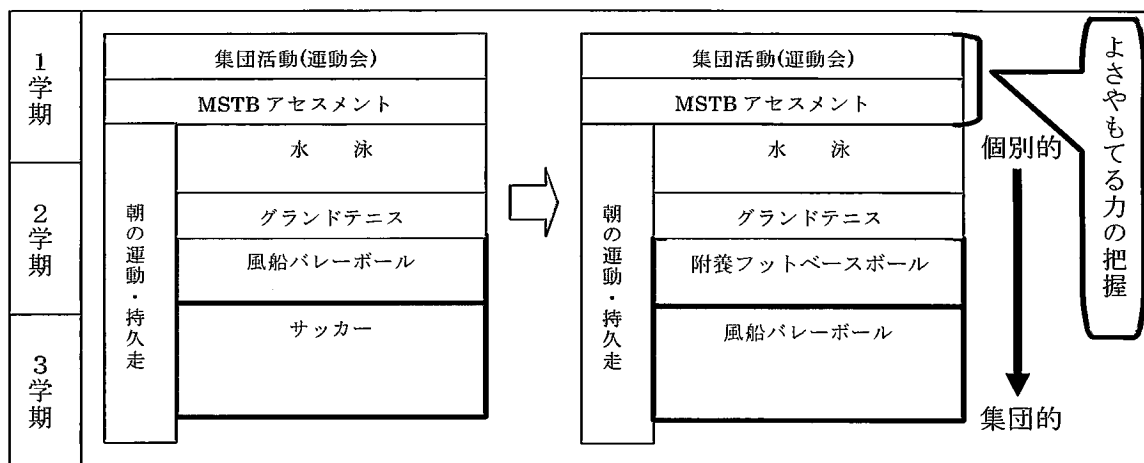


図4 題材配列の変更

本校中学部の体育では、図4の題材配列でも分かるように、生徒一人一人の運動技能の向上だけでなく、生徒のよさやもてる力にも目を向け、個別的な題材から集団的な題材へと配列を考え、子どもの実態を踏まえ、楽しんで取り組むことができることをねらいの柱として取り組んできている。つまり、一人でできたうれしさ、楽しさからみんなでできたという楽しさへと膨らんでいき、その点が、様々な場面に応用できるのではないかと考えた。

表2 各題材と主なねらい

題 材	運動技能に関すること	集団活動に関すること
集団活動(運動会練習)	基礎運動(歩く, 走る, 跳ぶ, 打つ, ける)を中心とした粗大運動の把握	集合 集団移動 ルール, 順番の理解
MSTB アセスメント	微細運動(ビーズ通し, 積み木うつし等), 粗大運動(立ち幅跳び, 前屈, 往復走等)の把握	集合 集団移動 ルール, 順番の理解
朝の運動・持久走	実態に応じた粗大運動を中心とする基礎運動(歩く, 走る, 跳ぶ, かがむ, またぐ)の習得, 向上。様々な運動に変形, 統合できるもの	ルール, 状況の理解
水泳	顔を水につける, 水中に潜る, クロール, 平泳ぎ等の泳法の習得, 向上	集合 ルール理解
グランドテニス	打つ(道具を使った目と手の協応動作, 二次元空間)の習得, 向上	集合 ルール理解 役割遂行(準備, 片付け) 一対一の対戦
附養フットベースボール	ける(目と足の協応動作, 二次元空間)の習得, 向上	集合 ルール理解 役割遂行(準備, 片付け) チーム対チームの対戦
風船バレーボール	打つ(目と手の協応動作, 三次元空間)の習得, 向上	集合 ルール理解 役割遂行(準備, 片付け) チーム対チームの対戦 パス

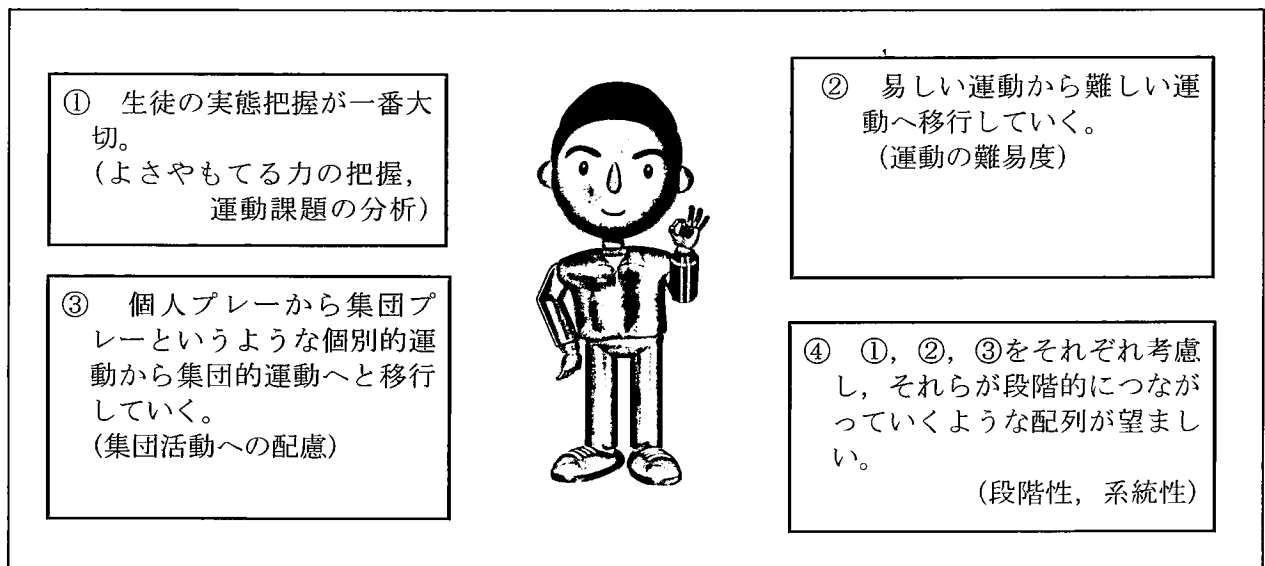


図5 題材配列についての考え方

(6) 運動プロフィール, 指導シートの導入

わたしたちは, MSTB, 日常の行動観察, 教育相談情報を分析した上で, 運動課題, よさやもてる力, 一人一人に応じた運動プログラム, 各題材での個人目標を設定する取組を行ってきた。そこで, 運動プロフィール, 指導シートの書式を導入したが, これらの書式は, 教師間における生徒の実態把握の観点の共有化, 生徒情報の共有化, 引き継ぎとしての役割をもつものとして考えた。(図6~7参照)

(7) VTRの活用

わたしたちは, 生徒の実態を教師間で共有化する手段として, VTRの活用が有効であると考えた。VTRを活用することで, 教師が様々な意見を出し合うことができ, 生徒の実態を多面的にとらえたり, 実態把握の観点を共有化したりすることが行いやすくなった。

- ① 生徒の体育への意欲的な取組を促す際に, 生徒一人一人の実態に応じた運動能力の向上にはどのような指導方法があるのかということについて, 授業ミーティングや授業を通して明らかにすることをねらった実践を行った。
- ② 授業ミーティングに至るまでの過程においては, 前述してきた外部の専門家からの助言を基に, 生徒の実態等を踏まえて, 運動学習等について整理した。
- ③ MSTBアセスメントを実施していく中でも助言等を受けた。
- ④ 助言に基づいて, 生徒の実態や課題をより多面的, 専門的にとらえることができるようになってきた。
- ⑤ MSTBアセスメントを実施することで, その情報から一人一人のよさやもてる力が明らかになった。
- ⑥ よさやもてる力を明らかにし, 発揮するには, これまでも作成していた運動プロフィールや, 各題材ごとに作成していた指導シートを見直すことが大切であるという共通理解が図られた。
- ⑦ 授業では必ずVTRを撮り, 授業ミーティングを進めて行く際の材料にし, 細かな動きをチェックしたり, 個人目標へ生かしたりするようにした。
- ⑧ 運動プロフィール, 指導シート, VTR活用は, 個人目標を達成するための教師の手立てを考える上で有効な手段である。



これまで述べてきたことを基に生徒のよさやもてる力を発揮できるように授業づくりを進めた。図6、7はわたしたちが考えてきた運動プロフィールと指導シートである。

運動プロフィール

中学部(3)年 氏名(D)

1 MSTBプロフィール

【アセスメント所見、よさやもてる力及び課題の分析】

各アセスメントには見通しをもち、主体的に取り組むことができた。教師の言葉掛けのモデリングによる理解が高い一方、動きがつかれてしまうところも強かった。

アセスメント結果については、視覚によるムーブメント、平衡性、柔軟性は得意とする様子が見られた。ただ、平衡性での歩行板では「手を腰にかかとをつま先に付けて歩く」といったルールが細かいためかスムーズに取り組めない様子も見られた。目と手の協応においては、体の中心線を交差させる積み木うっし(正中線交叉運動)、筋力、敏しょう性においては全体的に苦手な様子が見られた。

2 朝の運動(ねらい:基礎運動の獲得、充実)

(1) 個人目標

タイヤの上り下り、ハードルジャンプ、鉄棒に取り組み、全身の筋力を高め、より早く動くことができる。

横歩き、ロープくぐり、またぎ等に取り組むことで、身体意識や正中線交叉運動を高めることができる。

(2) 活動内容

棒体操

<p>①<input checked="" type="checkbox"/> 変形ウォーキング</p> <p>②<input checked="" type="checkbox"/> ハードルジャンプ</p> <p>③<input type="checkbox"/> ぶらぶら橋</p> <p>④<input type="checkbox"/> ライン渡り</p> <p>⑤<input checked="" type="checkbox"/> 鉄棒(斜め懸垂)</p> <p>⑥<input checked="" type="checkbox"/> ロープくぐり、またぎ</p> <p>⑦<input type="checkbox"/> 築山(坂)上り下り</p> <p>⑧<input checked="" type="checkbox"/> フープジャンプ</p> <p>⑨<input checked="" type="checkbox"/> ボール投げ(キャッチボールも含む)</p>	<p><input checked="" type="checkbox"/> ランニング</p> <p><input type="checkbox"/> ウォーキング</p> <p><input checked="" type="checkbox"/> タイヤ渡り</p> <p><input checked="" type="checkbox"/> 築山(タイヤ)上り下り</p>
--	---

(3) 指導及び支援(教師の働き掛け)

<input checked="" type="checkbox"/>	言葉掛け	}	視覚情報
<input checked="" type="checkbox"/>	モデル		
<input type="checkbox"/>	写真		
<input type="checkbox"/>	絵		
<input type="checkbox"/>	シンボル		
<input type="checkbox"/>	文字		
<input checked="" type="checkbox"/>	身体ガイダンス		

【備考】(情報量、タイミング、文字の色、大きさ等)

1、2年の経験から朝の運動の取り組みにはほぼ見通しをもっている。緩やかなペース、体に負担の少ないやり方で取り組む傾向が強い。

言葉掛け、モデリング、身体ガイダンスの教師の働き掛けて身体を意識した運動や身体をねじったり交差させる運動にそってできる運動には迅速に取り組めるように手拍子等の働き掛けを行うことが有効と考える。

(4) 評価

(5) 引き継ぎ

図6 運動プロフィール

「グラウンドテニス」 指導シート
 中学部 (3) 年 (C)

全体指導目標

- ラケットを使ってボールをねらって打ったり、転がるボールに素早く移動して止めたり、強いボールを打ったりすることができるようにする。
- 運動する場所の安全に気を付けるとともに、ルールを守ったりしながら、ゲームをすることができるようにする。
- 自分の係の仕事をしたり、友達の応援をしたりしながら、協力しながら活動することができるようにする。

観点	学習活動	実態
関心・意欲・態度	<ul style="list-style-type: none"> ・準備や後片付けに取り組みうとすることができる。 ・ラケットに興味をもち、手に取ることができる。 ・ボールに興味をもち、打とうとすることができる。 ・時間・杯ゲームに取り組みうとすることができる。 ・順番を守って友達と仲良く運動ができる。 ・ゲームの始まりと終わりに並んであいさつすることができる。 ・勝敗を素直に認めることができる。 ・友達の応援ができる。 ・決まりを守って安全に運動できる。 	1 <input type="checkbox"/> 2 <input checked="" type="checkbox"/> 3 <input type="checkbox"/> 4 <input type="checkbox"/> 5 <input type="checkbox"/> 1 <input checked="" type="checkbox"/> 2 <input type="checkbox"/> 3 <input type="checkbox"/> 4 <input type="checkbox"/> 5 <input type="checkbox"/> 1 <input checked="" type="checkbox"/> 2 <input type="checkbox"/> 3 <input type="checkbox"/> 4 <input type="checkbox"/> 5 <input type="checkbox"/> 1 <input checked="" type="checkbox"/> 2 <input type="checkbox"/> 3 <input type="checkbox"/> 4 <input type="checkbox"/> 5 <input type="checkbox"/> 1 <input type="checkbox"/> 2 <input checked="" type="checkbox"/> 3 <input type="checkbox"/> 4 <input type="checkbox"/> 5 <input type="checkbox"/> 1 <input type="checkbox"/> 2 <input checked="" type="checkbox"/> 3 <input type="checkbox"/> 4 <input type="checkbox"/> 5 <input type="checkbox"/> 1 <input checked="" type="checkbox"/> 2 <input type="checkbox"/> 3 <input type="checkbox"/> 4 <input type="checkbox"/> 5 <input type="checkbox"/> 1 <input type="checkbox"/> 2 <input type="checkbox"/> 3 <input type="checkbox"/> 4 <input type="checkbox"/> 5 <input checked="" type="checkbox"/> 1 <input type="checkbox"/> 2 <input checked="" type="checkbox"/> 3 <input type="checkbox"/> 4 <input type="checkbox"/> 5 <input type="checkbox"/>
技能・表現	<ul style="list-style-type: none"> ・止まったボールを打つことができる。 ・転がるボールに移動して止めることができる。 ・ドリブルができる。 ・ゴール(相手のいないところ)に正確に打つことができる。 ・強いシュートを打つことができる。 	1 <input checked="" type="checkbox"/> 2 <input type="checkbox"/> 3 <input type="checkbox"/> 4 <input type="checkbox"/> 5 <input type="checkbox"/> 1 <input type="checkbox"/> 2 <input checked="" type="checkbox"/> 3 <input type="checkbox"/> 4 <input type="checkbox"/> 5 <input type="checkbox"/> 1 <input checked="" type="checkbox"/> 2 <input type="checkbox"/> 3 <input type="checkbox"/> 4 <input type="checkbox"/> 5 <input type="checkbox"/> 1 <input type="checkbox"/> 2 <input type="checkbox"/> 3 <input type="checkbox"/> 4 <input type="checkbox"/> 5 <input checked="" type="checkbox"/> 1 <input checked="" type="checkbox"/> 2 <input type="checkbox"/> 3 <input type="checkbox"/> 4 <input type="checkbox"/> 5 <input type="checkbox"/>
知識・理解	<ul style="list-style-type: none"> ・自分のグループの場所が分かる。 ・始まりと終わりが分かり、プレー(あいさつ等)ができる。 ・サービスゾーンなどの(ルール)を理解し、プレーができる。 	1 <input checked="" type="checkbox"/> 2 <input type="checkbox"/> 3 <input type="checkbox"/> 4 <input type="checkbox"/> 5 <input type="checkbox"/> 1 <input type="checkbox"/> 2 <input checked="" type="checkbox"/> 3 <input type="checkbox"/> 4 <input type="checkbox"/> 5 <input type="checkbox"/> 1 <input type="checkbox"/> 2 <input type="checkbox"/> 3 <input type="checkbox"/> 4 <input type="checkbox"/> 5 <input checked="" type="checkbox"/>
思考・判断	<ul style="list-style-type: none"> ・使いやすい(自分の)ラケットを選ぶことができる。 ・相手の位置を考えて、シュートゾーンを変えて攻撃することができる。 ・安全に気を付けてプレーすることができる。 (ボールなどの障害物が多いところではプレーしないなど) 	1 <input type="checkbox"/> 2 <input checked="" type="checkbox"/> 3 <input type="checkbox"/> 4 <input type="checkbox"/> 5 <input type="checkbox"/> 1 <input type="checkbox"/> 2 <input type="checkbox"/> 3 <input type="checkbox"/> 4 <input type="checkbox"/> 5 <input checked="" type="checkbox"/> 1 <input type="checkbox"/> 2 <input checked="" type="checkbox"/> 3 <input type="checkbox"/> 4 <input type="checkbox"/> 5 <input type="checkbox"/>

1：一人だけで 2：言葉掛け、指差し等でできる。 3：身体的ガイドでできる。 4：やろうとする 5：難しい

※個人目標にかかわる実態にはアンダーラインを入れる。技能・表現は必ず入れる。

個人目標	<ul style="list-style-type: none"> ○ 教師のモデル提示や短い言葉掛けを手掛かりにして、ボールに素早く近付き、相手のゴールをねらって強くボールを打つことができる。 ○ 教師の短い言葉掛けや指差しを受けて、タイマーの操作や点数付けができる。
手だて	<ul style="list-style-type: none"> ・ 左右に動いてボールを止める練習 ・ 「走るよ」の言葉掛け ・ 「ゴールは？」の言葉掛けと確認 ・ タイマー「スタートボタン」の確認 ・ 「どっちに1点？」の言葉掛けと旗の確認
評価	これまでの経験と B 君の見通しを考え、始めから試合形式で活動に取り組みました。ゴールの確認をすることで、「どこをねらうの？」の言葉掛けにゴールを指さし、ねらって打つことができるようになってきました。また、「走るよ」の言葉掛けと左右に転がしたボールを追う練習で、ボールに走り寄る姿が多く見られるようになりました。係の仕事では、タイマー操作は教師と一緒に取り組み、点数付けは試合の流れを自分で見てほぼ正確にできました。
課題	<ul style="list-style-type: none"> ○ よりゴールをねらって打つこと ○ 相手のいない方にボールを打つこと

図7 グラウンドテニス 指導シート

(8) 成果と今後の課題

わたしたちはこれまで、一人一人の生徒がよさやもてる力を発揮して集団活動に意欲的に取り組むことができるように、運動に関する専門家の助言を基に中学部の生徒に合わせて、実践、検討を重ねてきた。

そして、生徒の実態把握や指導内容、指導方法についてミーティングを開き、授業づくりに反映してきた。

【成果】

- 生徒の実態把握の観点を明確にしていくために、VTRを活用して授業ミーティングを行ってきた。授業ミーティングで様々な角度から教師間で意見を出し合い、生徒一人一人の実態を明らかにしていく中で、生徒のよさやもてる力や目標設定を具体化することができた。
- 客観的なデータ（MSTB）を取り、生徒一人一人の実態把握からよさやもてる力、課題を明確にすることで運動プロフィールや各題材に対しての指導シートを作成したり、改善（使いやすさ・分かりやすさ）したりすることができた。また、作成・改善するだけでなく、次の題材や次年度への引き継ぎ資料となるように利用することで、一貫した系統的な指導ができるようになった。
- 運動技能の習得だけでなく、集団活動の観点も踏まえて、題材配列の変更や題材の見直し、各題材と主なねらいを明確にすることができた。

【課題】

- 運動プロフィールや指導シートの作成等を行ってきたが、それらが煩雑にならないように工夫していくことが大切である。
また、それらをどのように生かしていくことが望ましいのか、再度整理することが大切である。
- 題材配列の基本的な考え方（①よさやもてる力の把握・運動課題の把握，②運動の難易度，③集団活動への配慮，④段階性・系統性）を再度整理し、題材配列や指導内容の精選を行っていくことが大切である。

研究内容 2 集団活動の中で、一人一人の生徒がよさやもてる力を発揮できる学習環境や教師の働き掛けを明らかにする。

(1) 研究取組前の体育の授業における課題

本校中学部では以前から、生徒が活動に見通しをもち、主体的に行動できることを目指して様々な学習活動を展開してきた。体育の授業においても題材ごとに指導計画を検討し、改善を重ねてきたが、活動内容が多岐に渡り、運動技能等の専門的な分析が難しいこと、題材ごとに生徒のグループが変わり、担当する教師も変わることで、題材のねらい及び実態把握の観点の検討の不十分さ等から、一人一人のよさやもてる力及び課題等の実態把握が十分とは言えなかった。

また、これまでも生徒の「できない・困っている」状態像に気づき、何らかの働き掛けや学習環境の工夫を行い、すぐに変化が見られない場合、その原因として認知面や運動技能面、障害特性といった生徒の個人因子の問題についての検討を行っていた。しかし、学習環境及び教師の働き掛けといった手立ての設定については各担当教師独自の創意工夫に任される部分が多く、反省点として挙げられることが多かった。そのため、それぞれの教師の努力はあるものの、学部の全教師で一人一人の生徒の実態や個人目標を共通理解すること、協力して教材・教具を工夫すること、共通した働き掛けをすること、情報を共有して次の題材に生かすこと等の学部内連携の確立までには至らず、題材や学年が変わるたびに新しい方法を再考したり、試行したりすることもあり、生徒が戸惑う様子が見られていた。



図8 できない・困っている状態像から予想される生徒の思い

そこで、学習環境の四視点である「やりたい環境、わかる環境、できる環境、できたと思う環境」づくりと、教師の働き掛けの三視点である「自発を促す働き掛け、実行を支える働き掛け、達成感を高める働き掛け」の工夫を行うことで、「やりたい、わかる、できる、できた」となる姿を実現し、自分のよさやもてる力の発揮を目指した取組を行うことにした。

(2) 取組の実際

① 体育の授業における学習環境の工夫

わたしたちは、体育の授業の各題材において一人一人のよさやできることを生かし、それを集団の中で発揮するために、全体研究の学習環境リスト（p.15 -表2）の三項目に着目して学習環境を見直し、実践・検証、評価・改善を行った。また、題材が変わっても有効であると思われる学習環境は引き続き実践してきた。以下、体育における様々な学習環境の工夫例を紹介する。

表3 学習環境の工夫例 1 (全題材または複数の題材で共通して実践)

名称・写真	使用方法	意図	四視点※	備考
 チャップ君	集合・整列時に列の先頭に置く	整列場所, 所属チームへの見通し	わかる できる	・強度の高い紙皿にチームごとに色を塗り製作。 ・軽量, 安全, 安価。
 ビブス	チームごとに色分けし, 番号を考慮して着用	チーム, 整列順番, プレー順番, パス相手への見通し	やりたい わかる できる	・チャップ君, コートライン等と同色。 ・教室前で着用し, 移動。
 ビブス入れ	チームごとに色分けし, 常時準備	チームへの見通し, 準備や片付けへの見通し	わかる できる	・チームカラーに対応。 ・生徒の見やすい位置に常時準備。 ・軽量のかごで運びやすい。
 足形	必要な生徒の適切な場所に設置	立ち位置, 踏み込み位置, 方向への見通し	わかる できる	・形 (足形, 枠囲み等), 大きさ, 色, 素材 (紙, 滑り止めシート等) 段差調整等自在。
 体育CD (BGM, タイマー)	必要な場面で流す	歩, 走の行動調整, 開始と終了, 経過時間への見通し	やりたい わかる できる できたと思う	・活動に応じた固定曲。 ・親しみやすい曲, 声。 ・テンポや曲想等に配慮。
 ボール, お手玉入れ	必要な数の枠にボール等を並べる	プレー回数への見通し	やりたい わかる できる できたと思う	・生徒の使いやすさに配慮。
 メンバー表  得点表  対戦表  コート番号		役割, 順番, 得点, チームメイト, プレー場所等への見通し	やりたい わかる できる できたと思う	・チームカラーと対応。
 ルールカード,  ルールボード		ルールへの見通し	やりたい わかる できる できたと思う	・同時, 継次処理に配慮。 ・個人提示及び全体掲示用。
導入終末エリアと展開エリアの分離 (移動動線の単純化, 準備時間の短縮, 活動変化への見通し)			わかる できる	
コート材 (段ボール) やコートラインの色をチームカラーと対応			わかる できる	

(※: 生徒によって働きは異なる)

表4 学習環境の工夫例 2 (現時点では単一題材で実践)

名称・写真	意図	四視点※	名称・写真'	意図	四視点 ※
 ラケットかご	準備や片付けへの見通し	やりたい わかる できる	 得点ベル (成功すると鳴る仕組)	得点, 行動の完了, 的への見通し	やりたい わかる できたと思う
 係分担表	準備や片付け, 役割への見通し,	やりたい わかる できる できたと思う	 アタッカーはちまき キャプテン腕章	自他の役割への見通し	やりたい わかる できる
 周回数テープ (一枚ずつはがす)	残りの回数(周回数)への見通し	やりたい わかる できる できたと思う	 朝の運動確認表 (廊下に掲示)	スケジュールの見通し	わかる できる
 パトランプ (成功すると点滅)	行動の完了, 得点への見通し	やりたい わかる できる できたと思う	 サーブ順番ボード	順番, 活動内容への見通し	わかる できる
 興味・関心や特性に 応じた的	動機付け, 注意保持	やりたい わかる できる できたと思う	 優勝カップ	動機付け 集団意識	やりたい できたと思う

(※: 生徒によって働きは異なる)

② 体育の授業における教師の働き掛けの工夫

わたしたちは、全体研究を踏まえ、それぞれの生徒の体育における様々な行動について、「自発を促す働き掛け」「実行を支える働き掛け」「達成感を高める働き掛け」の三視点について、身体ガイダンス、モデリング、指さし、言葉掛け、視覚的情報提示の5種類に整理し、適切な働き掛けを考えることにした。

まず、これまでに行ってきた発達検査や、MSTBを分析した運動プロフィール、体育を中心とした授業や日常生活の様子等から、一人一人にどのような働き掛けが有効かということについて授業ミーティングを設定して検討した。その際、実際の授業で自分がどのような働き掛けをしているのかが見えにくいという意見があったこと、時間の有効利用や共通理解のしやすさ、意見の出しやすさ等を考慮し、VTRを活用して生徒への働き掛けを分析、検討した。

VTRを用いた授業ミーティングを繰り返しながら、「今のは必要以上の身体ガイダンスでは」「もっと具体的で短い言葉掛けがよいと思う」「まずは言葉掛けだけでなく指さしも必要なので

は」「今のモデリングの後で生徒の行動が変容したので、具体的で分かりやすかったのでは」「自分はこうしたらうまくいった」等の積極的な意見交換を短い時間で気軽に行うことができた。

次に、「走らないで」「走ってはいけません」といったような、否定的・抽象的な言葉掛けではなく、「歩きます」「止まります」というような、望ましい行動を具体的に伝える等の働き掛けやその際に使用する用語についても共通理解することができた。

さらに、生徒ができるようになったことについて、生徒が見通しをもって主体的に活動できるように少しずつ支援を減らすフェイディングの手続きを積極的に執ることを共通理解した。

③ 集合・整列場面における課題解決の実践例

以上のような手続きで、学習環境と教師の働き掛けの両面を工夫し、実践・検証、評価・改善することで、どのように体育の授業が変化してきたのか、集合・整列場面の例を紹介する。

研究開始時の集合・整列場面を観察してみる(図9)と、生徒A、Bは見通しをもち、適切に行動しようとするが、生徒C、D、E、Fが見通しをもていないことで、集団としてまとまらず、その結果A、Bを含めた多くの生徒が困惑している様子が見られた。このように集団活動では一つの「できない・困っている」状態像にも集団的課題、一人一人の課題が同時に存在していることが多いと考えられた。

わたしたちは、「整列に教師の支援を多く必要とする」という集団の課題を解決するために、まず、口頭での報告やVTR及び運動プロフィール等の活用を通して、一人一人の生徒の課題分析を行った。その際、各生徒のよさやもてる力に着目し、生徒Aはどこに並べばよいのかに見通しがもてず歩き回っている状況なので、最適な立ち位置に来れば他の生徒のモデルになれるかもしれない、生徒Bは「集合」の言葉に見通しをもち、教師の近くに素早く来ることができるので、友達に「並んでください」と言葉を掛けるように指導することで落ち着いてリーダー的な役割を担うこともできるようになるのでは、生徒Cは生徒Aが好きで接近し過ぎていることが多いが、友達の動きをよく見て、それに合わせて行動できるととらえ、両者に適切な接近距離を指導することでよさやもてる力の向上につながるのでは、生徒Dの得意な数字を生かすことはできないか等について意見交換を行い、実際に運動プロフィールの結果を見たり、VTRで確認し合ったりした。特に、VTRの活用は、それぞれの教師の主観ではなく客観的な視点で情報を共有できた点が有効であった。



図9 研究開始時の集合・整列場面の生徒の様子（下線部はよさやもてる力）

次に、課題解決の手立てを学習環境及び教師の働き掛けの両面からとらえ、改善策を検討し、実践・検証、評価・改善を重ねてきた。図10は、集合・整列状況改善のための手立ての工夫・調整の様子である。

まず、学習環境の面では、先に紹介した工夫の中から、色を対応させたビブスとチャップ君、体育のBGMを録音したCD、係分担表、各種準備に関する支援の道具（ポール立て、ラケット入れ等）を選定し、活用した。また、教師の働き掛けの面では、一人一人に応じて身体ガイダンス、モデリング、指さし、言葉掛け、視覚的情報提示の中から適切な働き掛けを見極め、状況に応じたフェイディングをこれまで以上に意識して行うようにした。

その結果、集合や整列がスムーズになり、教師の支援が軽減し、生徒の主体的な行動の増加による集団活動の質の向上が確認されるようになってきた。集団が変化してきたことで、これまで列から飛び出して声を出す等の注意喚起行動が多かった生徒Eが、「みんなと同じ方がかっこいい」と、望ましい行動を理解して集団にいたることができるようになったり、そのことで音に敏感な生徒Fが落ち着いて参加できるようになり、指示をよく受け入れるようになったりするなど、一人一人の変化が見られ、さらにそれが集団の質の向上につながったように感じられる。

① 体育の授業前



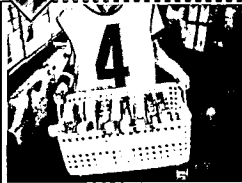
←廊下に常に置いてあります。



↑自分で着ます。
←さあ体育館に移動！

授業が始まる前に、教室前の廊下に置いてあるビブスを着用します。色が目立つので、友達を見て他の生徒も気付いて着ることが多くなりました。「体育が始まる」との見通しをもちやすく、体育館等への移動もスムーズになってきました。

② 体育館に着いたら…



←かごに枠を付けたラケット入れ



←風船スケール



←体育倉庫から出すのは難しく危険。でもこうすればOK！
木工班の教師が製作しました。

コートや風船等の道具の準備や後片付けも主体的な学習にはなくてはならない活動です。分担された仕事を自分たちで係表を確認して行います。できるだけ生徒が主体的に活動できるように風船スケールやコートポール立て等、安全面や使いやすさを配慮して改良しています。

③ 準備が終わったら…



ア 体をほぐしながら歩きます。



イ 曲が変わると一斉に走ります。

準備が終わると曲を流します。生徒は自然と歩き始めます。次にアップテンポのランニング曲（5分）、最後に再びウォーキング曲に変化します。最後の曲の終わりには自然と集合場所に集まることができるようになり、この間の教師の指示はほとんど必要なくなりました。年間を通して同じ曲を使用しています。

④ 最後に集合・整列



以前は、教師が横に並ぶことが多くありました。

列の先頭に置いた「チャップ君」とビブスの色や番号を手掛かりに並ぶことで、身体ガイダンスや指さし、言葉掛け等の教師の働き掛けが軽減しました。数字に見通しのもてる生徒を中心に、自分たちで順番に並ぶこともできやすくなりました。グループ編成が変わっても大丈夫です。

図10 集合・整列状況改善のための学習環境と教師の働き掛けの工夫

(3) 成果と今後の課題

研究当初は、支援に必要な道具の過剰な使用や教師の過剰な働き掛けも見られたが、P-D-C-A サイクルを踏まえた授業ミーティングを通して、一人一人の生徒にとって適切な支援について焦点化を図ることができるようになってきた。

それぞれの学習環境の工夫が一人一人の生徒や集団にとって有効となるか否かは教師の活用の仕方、働き掛け方次第である。一方、教師が最適な働き掛けができるための学習環境の整備も不可欠である。学習環境と教師の働き掛けは独立して工夫や検証をするものではなく、授業の中で実践したり、フェイディングしたり、必要に応じて再度行ったりしながら、相互に影響し合っただけで変化させていくものであると考える。

学部ミーティングを重ねることで、以前にも増してそれぞれの教師の思いや悩みを共有することができ、一つ一つの課題を学部全体で解決しようとする雰囲気が醸成されてきた。学部教師間の連携が進んだことで、働き掛けの過不足や、工夫した学習環境を生かし切れない場面、フェイディングの時期や段階が不適切等、最適とは言えないわたしたちの姿についても、率直に指摘し、それぞれが把握している生徒の実態や各教師の経験を共有し合えるような建設的な意見交換をすることができるようになってきたことも大きな成果である。

その結果、生徒が見通しをもって主体的に活動する様子が多く見られるようになり、適宜支援を減らしたり、支援に必要な道具を変更したりすることができた。また、題材が変わっても共有した方がよい学習環境や教師の働き掛けについても少しずつ整理することができ始め、他の指導の形態においても共有の支援方法として活用することができつつある。

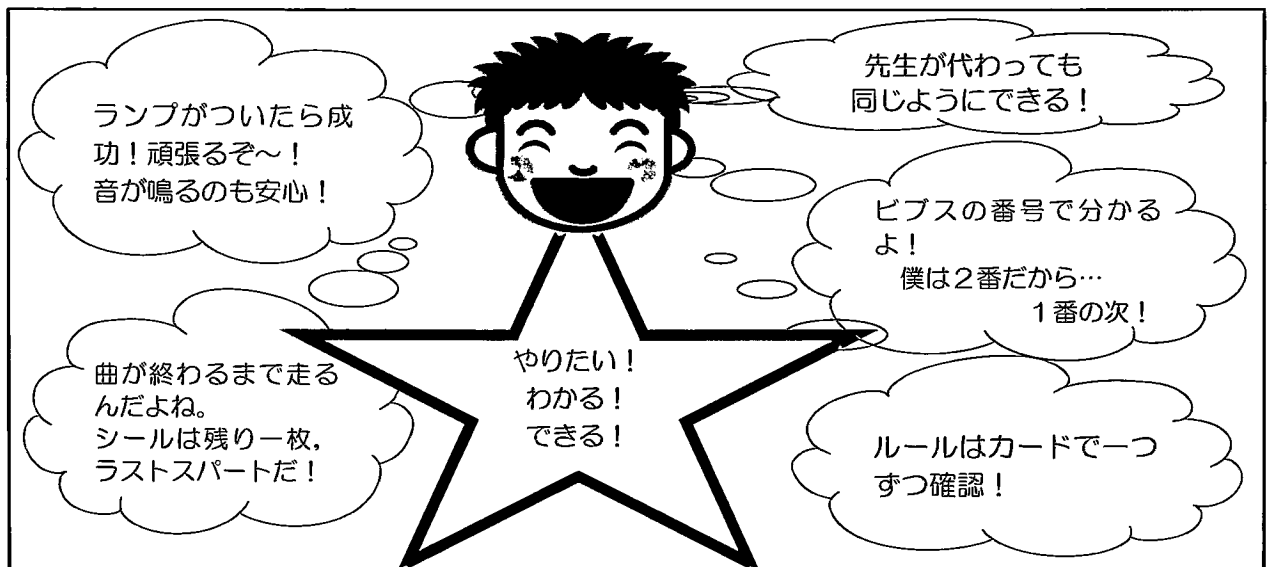


図11 学習環境と教師の働き掛けの工夫によるできない・困っている状況の解消

また、研究内容1で述べた専門家による助言を踏まえた学習課題の分析と個人目標の設定を行い、本研究内容における学習環境及び教師の働き掛けの工夫によって、集団活動の中で一人一人がよさやもてる力を発揮した授業に変化してきたことで、「楽しむことが目標」の体育から、「できるから楽しい、楽しいからしたい、できるようにになりたい」体育へと変わりつつある。

今後の課題としては、一人一人の生徒への支援の妥当性の検討が挙げられる。例えば、K-ABC心理・アセスメントバッテリーを活用して、生徒の認知処理の特性を検証し、継次処理型であれば、ルールの確認をめくり式のルールブックに変更したり、写真カードや文字カード等の必要な情報を一つずつ提示したりするなどの検討が必要であると考えられる。

また、現在行っている学習環境の工夫を表にまとめたり、運動プロフィール等の評価分析等で教師の働き掛けをまとめたりするなど、学習環境や教師の働き掛けについて、他の生徒や他の題材及び指導の形態で共有できるよう検討したい。

研究内容3 生徒がよさやもてる力を発揮できる有効な学習環境や教師の働き掛けを、様々な場面に応用する取組を探る。

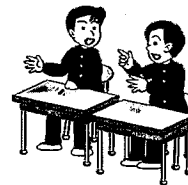
(1) 中学部がこれまで大切にしてきた「生活に生かす」取組

先の学部研究テーマでも述べたように、中学部では「すこやかな心と体を持ち、実際の生活に生かすことのできる基礎的・基本的な内容を進んで身に付け、ともに力を合わせながら、実践的・主体的に活動しようとする生徒を育成する」ことを目指して、生徒が学習によって獲得している力、すなわち「もてる力」を生活場面でも発揮できるように、教育的ニーズを踏まえて「生活に生かす」内容を重視して日々の実践に取り組んできた。

これまでの取組の中から、具体的に生徒の様子を述べてみる。

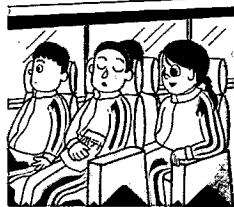
Aさんは、国語の時間に「日記・手紙」グループで学習している。身近な言葉を用いて、簡単な文章を書いたり、読んだりすることができるようになったことが自信になり、昼休みや休日に友達や教師に自ら手紙を書いてやり取りを楽しむようになった。

また、B君は、「伝えよう」グループで国語の学習をしている。これまで相手の質問に対する答え方が分からなかったり、困った場面に遭遇すると不適切な言葉遣いになったりすることがあった。学習では、絵カードや教師がやり取りをしているモデルのVTRを活用して、「こんなときはどうする？」というような実際的な場面を想定した学習を積み重ねてきた。様々な場面で会話の仕方等や敬語の使い方を学習することで適切な言葉遣いができるようになり、友達や教師とのコミュニケーションがうまくとれるようになってきた。



C君は、数学の学習では、「買物・計算」グループで学習している。足し算や引き算ができる力をもっているものの、金額とのつながりが十分もてず、実際の買物になると自分でお金のやり取りをするまでには至っていなかった。買物を通した数の計算に継続して取り組み、学習で使用したワークシートを家庭でのお使い場面でも活用し、一人でレジで必要なお金を出すことができるようになった。

D君は、出掛けることが大好きで、小学部のときには家庭で「出掛ける」と聞いただけですぐに出掛けるものだと思い込んで玄関に行き、「出掛けるのは今日ではない」ということを説明されると混乱することがあった。中学部の生活単元学習では、単元の始まりに生徒が学習の内容に見通しをもてるように学習計画表を作成している。修学旅行を楽しみにしていたD君は、家庭でも学習計画表を活用して、写真を手掛かりに旅行当日までの学習スケジュールを確認し、当日も楽しく参加できた。また、家庭訪問時に、家庭ではカレンダーにシールを張っていることを保護者から聞き、早速、学校でもカレンダーを活用することができた。



このような実践は一例であるが、中学部では、授業で獲得した力を、学校、家庭、地域生活で応用して、よさやもてる力を発揮できるように実際の・実践的に取り組むことが重要であると考えている。

(2) 前次研究の取組から

これまでは、個別の取組に関しては、学校—家庭、保護者—教師—本人と連携を取りながら支援の共有化を図ってきた。また、前次研究で取り組んだ生徒の生活をつなぐ支援体制づくりでは、専

門家の意見を聞いたり、ボランティアと関係して働き掛けを共通理解したり、生徒が校外で支援を受けているスポーツ講座の指導員にゲストティーチャーとして授業に参加してもらい交流をしたりすることができた。

しかし、生徒の活動の場所が広がってきたことで地域生活における集団の場で、生徒一人一人が自分のよさやもてる力を発揮するには、いくつかの課題も見られた。

子どもの様子

- ・ 様々な活動の場で余暇活動を過ごしその活動の場が広がっている。
- ・ 活動に参加しても、どう動いていいか分からなかったり、見通しがもちにくかったりしてよさやもてる力を発揮することが難しい様子が見られる。



保護者の思い

- ・ 将来の生活に向け、活動の場が広がり、余暇活動が充実してほしい。
- ・ 健康・体力面で体を動かすことのできる余暇活動があったらいいなあ…。
- ・ 新しい活動の場でもルールを守ってみんなと一緒に楽しく活動してほしいなあ…。



生徒がよさやもてる力を発揮できるようになるために、授業において効果的だった学習環境と教師の働き掛けを様々な集団活動の場面に応用する取組を探ってみよう。

関係機関

- ・ 具体的な支援方法が分からなくて困るなあ…。
- ・ プール教室のときにルールが守れない。学校ではどうしているのだろう。



教師の思い

- ・ 体育の学習では、見通しをもって自ら道具の準備をしたり、ビブスの色を手掛かりに自分のグループやチームが分かり、ゲームに取り組んだりしている。
- ・ 広がってきている学校以外の活動の場でもよさやもてる力を発揮してほしいなあ…。



(3) 授業実践と生活場面の実践を関連させる取組

中学部では、授業で獲得した力を学校、家庭、地域生活で応用する実践を生活場面の実践と考え、具体的な取組を下図に示す。

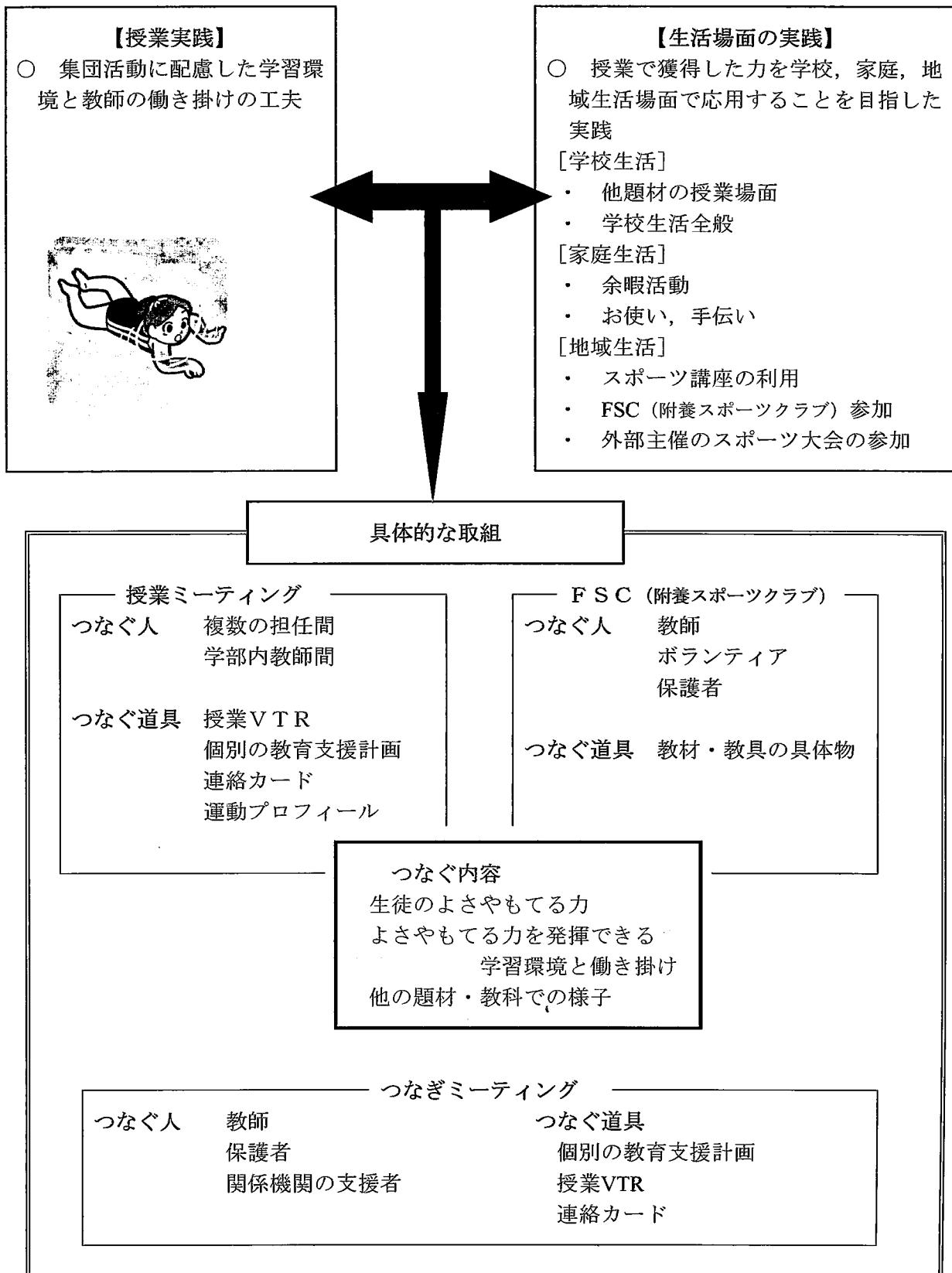


図12 中学部における授業実践と生活場面の実践の関連

(4) 授業で獲得したよさやもてる力を他の題材や地域生活の集団活動の中で発揮できた実践例

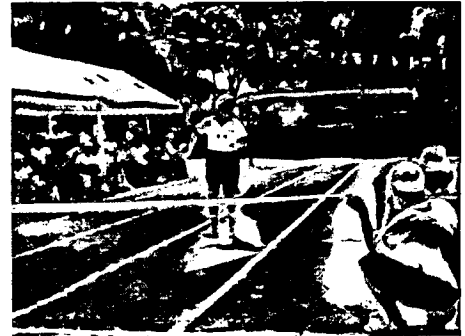
- ① 対象生徒 B君 (中学部2年男子)
- ② 状態像 (入学時の体育の様子)

運動への苦手意識が強く、朝の運動のランニングでは涙ぐみながら運動場を走る様子が見られた。昼休みに外での活動に誘っても、あまり気乗りしない様子であった。また、肥満傾向にあり、暑さが苦手な休み時間はパソコンをしたり、好きな文字をノートに書いたりして過ごすことが多かった。

③ 実践

ア 1年時の体育の場面

苦手だった運動ではあるが、どれだけ活動したら目標達成できるのかが分かるような学習環境を工夫したり、暑さを苦手とするB君に、「頑張ったら涼しい所でお茶が飲めるよ」などのように実行を支える働き掛け(ここでは言葉掛け)を行った。入学後の5月の運動会の短距離走では、本人が自信をもって走ることができるよう、記録の近い生徒たちの班より少し記録の遅い班に編成するなど工夫して、達成感を高める働き掛けをしたことで、1位になることができた。このことをきっかけに、自分で目標を決め、最後まで取り組むことが増えてきた。



運動会で1位になったB君

【連絡カードより】

題材名	グランドテニス	
全体目標	<ul style="list-style-type: none"> ○ ラケットを使ってボールをゴールに向かって打ったり、転がるボールを止めたりすることができる。(技能面) ○ 運動する場所の安全に気を付けるとともに、ルールを守ったり、自分の力を精いっぱい出したりしながら、ゲームをすることができる。(態度面) 	<p>ボールをよく見て、 力強くシュート!</p>
個人目標	○ 教師の言葉掛けを手掛かりに、相手コートから来たボールに走り寄って、ゴールをねらって力強く打ち返すことができる。	
実施期間	平成17年9月中旬～10月下旬	
学習の様子		
<p>グランドテニスは初めての経験でしたが、ラケットでボールを打つ見通しはすぐにもてました。的当てゲームは、ボウリング等の経験もあってか見通しはもてており、的に向かってボールを打とうとする意識は高く、ボールを打つ際に的をよく見て打つことができました。勝つことへの意欲が高まり、素早く動く、ボールを止めてよく見て打つことができるようになりました。フォアハンドで打つことが難しく、力強さについては課題が残りましたが、自分なりに工夫して、バックハンドで力強く打つことを意識して活動することができました。</p>		

昨年のこの時期の取組では、まだビブスの着用には着目していませんでした。生徒は、自分の名前カードを手掛かりにグループごとに集合していましたが、文字だけによる情報では、なかなかもてる力を高めることが難しく、教師の「〇〇君、こっちだよ」などの言葉掛けが飛び交っている状況でした。

イ FSC（附養スポーツクラブ）への参加



学生ボランティアとの顔合わせ

- ・ 参加当初は、保護者のニーズが高く、本人は促がされて参加していた。
- ・ 保護者は、運動量の多いラグビーを希望していたが、本人は風船バレーボールを希望した。
- ・ 体育の授業で行った風船バレーボールがきっかけ（運動技能の高まり、ルール理解）となり、FSCでも笑顔で参加するようになった。

FSC（附養スポーツクラブ）とは

前次研究の取組で立ち上げた放課後のスポーツクラブである。大学の教師や学生が活動支援者として参加している。保護者も活動支援者に含まれる。

本年度は、ダンス、風船バレーボール、ラグビーの三つのグループで展開している。また、設立当初は、中学部生徒が対象であったが、中学部卒業後もFSCが教育的ニーズに応じる場として継続・発展してほしいという願いがあり、本年度から高等部の生徒にも対象を広げている。運営主体者は保護者であるが、生徒がよさやもてる力を発揮できるように教師がサポートに入ったり、学生ボランティアと連携したりしている。



【連絡カードより】

題材名	風船バレーボール	<p>名前を呼んで友達にパス</p>
全体目標	<ul style="list-style-type: none"> ○ ボールをよく見て素早く移動したり、打ったりすることができる。(技能面) ○ 友達へ言葉掛けをしたり、ルールを守ったりして、チームで協力しながらゲームをすることができる。(態度面) 	
個人目標	<ul style="list-style-type: none"> ・ 教師の言葉掛けを基に友達が打ちやすいようにパスしたり、ルールを守って試合に参加したりすることができる。 	
実施期間	平成17年11月上旬～平成18年1月下旬	

学習の様子


風船に走り寄って打ったり、友達にパスしたりする練習や、実際に試合を経験することを通して、チームプレーやルールを守って活動することができるようにしました。FSCでの経験もあり、見通しをもって意欲的に取り組むことができました。ルールは教師が言葉で伝えるよりも、主要なルールを絵と文字で表したルールボードを必要ときに読むことで、理解したり、覚えたりすることができました。大会のころには、ルールボードで確認しなくてもルール(パスのときは名前を呼ぶ、アタックを打つときはラインの後ろから打つなど)を守って活動することができるようになりました。大会では惜しくも優勝を逃してしまいましたが、FSCでも試合ができることを確認すると、来年の活動に意欲的になることができました。





前題材のグランドテニスでの取組を振り返って、生徒が自分のチームが分かるためにはどうしたらいいのかを授業ミーティングで話題にし、チームごとにビブスの色を決めて、さらにビブスの番号を手掛かりに1番から2番へパスというように分かりやすくしたことで、主体的な場面が増えた。

連絡カードとは

授業担当者と担任が題材ごとに明確な目標や学習を通しての生徒の変容を記録し、保護者に伝えているA4サイズのプリントである。また、学部内教師間をつなぐ道具としても活用している。さらに、コピーした記録を次の単元や次年度の学習への引継ぎ資料としても活用し、記録を蓄積している。最初は、生活単元学習で取り組み始めた連絡カードであったが、現在はすべての指導の形態においても作成し、個別の指導計画ファイルとしても扱っている。保護者には、生徒の変容が分かりやすいと好評であり、学習によっては、保護者のコメント欄のある連絡カードもあり、学校が家庭での取り組みの様子を把握することにも役立っている。

題材名	サッカー	
全体目標	<ul style="list-style-type: none"> ○ 「サッカー」のルールを知り、ボールを止めたり、けったりする簡単な技能を身に付けることができる。 ○ 友達へ言葉掛けをしたり、ルールを守ったりして、チームで協力しながらゲームをしたり、得点係をしたりすることができる。 	 <p>力強い3点シュート！</p>
個人目標	<ul style="list-style-type: none"> ○ 自分で決めた得点ポイントにボールを止めて、助走を付けて、大きく足を振り上げてシュートすることができる。 	
実施期間	平成18年1月中旬～2月下旬	
学習の様子		
<p>PK戦形式の試合を通して、シュートしたり、キーパーをしたりする活動に取り組みました。ドリブルをして、3点ラインの上にボールを止めることができました。また、ゴールをよく見て、ボールを強くけるために大きく足を振り上げることを意識しながらシュートできました。友達へのパスや、ゴールキーパーも上手にできるようになりました。大会で優勝ができなかったことを残念がっていましたが、成績には満足していました。</p>		

題材名	持久走（朝の運動）	
全体目標	個々に応じたペースで長距離を走り通すことにより、持久力を高めるとともに、最後まで頑張ることでの達成感や満足感を味わうことができる。	
個人目標	友達や教師のペースを手掛かりに、少しずつペースを上げて走ることができる。	
実施期間	平成18年1月中旬～2月下旬	
学習の様子		
<p>学校内の持久走コースを使い、徐々に周回数を増やしながら練習を重ねました。自分で5周を選択し、同じペースで練習することができました。前を走っている友達や教師を目標に、少しずつペースを上げ、速く走ることができるようにしたところ、記録更新が増え、記録表を確認することで意欲が高まりました。持久走大会当日は、大勢の応援もあり、自己ベストを記録しました。</p>		
担任からのコメント		
<p>この一年で、運動に関する技能が高まり、できることが更に意欲を高めています。各題材で視覚的な支援を多く取り入れたことで、ルールを理解や技能面のポイントをつかむことができるようになりました。休み時間や家庭、放課後のスイミングでも、自分から運動に取り組む姿勢が見られ、継続的な取組により更なる成長が期待できると思います。</p>		



一年生のときは、自分で5周走ることを目標に決めて頑張りました。昨年の学習の経験から二年生では、4周グループに入り、一位を目指すことを目標にしました。本年度の持久走の練習は笑顔で取り組んでいます。

持久走練習での様子



分かりやすい学習環境、視覚支援を多く取り入れた働き掛け、繰り返しの多い活動が対象生徒の主体性を喚起したことが分かってきた。

ウ ふうせんバレーボール大会参加

体育の授業で行った風船バレーボールとFSCでの活動により、自信が付いてきた。その結果、学校以外で行われる外部主催の大会に初参加することもできた。



できる、できたと思う自己有能感が高まった

風船バレーボールとふうせんバレーボール

ふうせんバレーボールとは、1998年に北九州で生まれた、障害の内容を問わず、子どもも高齢者も一緒に楽しむことができるスポーツである。本校の中学部には、実際に知的障害者福祉センターでの「ふうせんバレーボール」講座に参加するなど、地域生活においてスポーツ講座を利用している生徒もいる。

ふうせんバレーボールには、公式ルールがあるが、中学部の生徒がふうせんバレーボールの面白さを知り、基礎的技術・技能を授業の中で習得できるように独自のルールで取り組んでおり、中学部では「風船バレーボール」と漢字で表現を別にしてしている。

エ 本年度の体育の場面

学習環境や働き掛けを学部内教師間で共有することで、グループが変わっても主体的に活動する場面が飛躍的に増えてきた。

【朝の運動（棒体操）の様子】



棒体操は、生徒のMSTBを活用した実態把握の結果、体の柔軟性を高めたいとの思いから、新たに取り組み始めた朝の運動の内容の一つである。雨天時でも室内でできる運動として生徒も楽しんで取り組んでいる。



教師の見本を手掛かりに、棒を使った体操に笑顔で取り組んでいる。

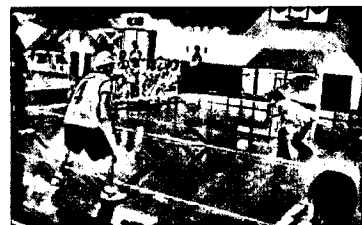
棒体操の様子



【グラウンドテニス】

各題材の最後には、学習のまとめに大会を位置付けている。保護者の参観もあり、生徒にとっては自分たちの頑張っている姿を保護者に応援してもらえることで大きな自信と喜びにつながっている。

今年のグラウンドテニス大会では、実際に保護者にも入ってもらい親子で対戦をする場面もあった。試合後、保護者から「見るのとするのでは大きく違いますね。思った以上に体力を使いました。」などというコメントがあった。



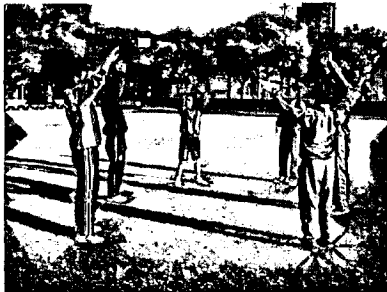
親子対戦の様子



オ FSC（附養スポーツクラブ）への参加

今年度は自分から、積極的に参加を希望した。保護者は風船バレーボールへの継続的な参加を考えていたが、本人はラグビーを希望した。屋外の活動であることや、入学当初は、苦手としていた走る活動が多い競技であるため、周囲の大人には不安もあったが、本人の強い意志を尊重し、ラグビーを始めた。夏の暑い中でも、笑顔で走り、友達やコーチと一緒にルールに則して活動をしていた。

ボランティアは、K大学教育学部の保健体育科の学生であり、特別な支援を必要とする生徒とかわるのが初めてであった。初めは、学生がどう接していいのかわからずに困っている場面も見られたが、中学部の教師がサポートに入ったり、学校で効果のある手立て（学習環境や働き掛け）を紹介したりして同じような支援ができたことで、確実に学生のかかわり方が変わり、活動が充実してきている。教師と学生ボランティアが働き掛けにおいて有効な情報を共有したことで、生徒が生活実践の場面でも自分のよさやもてる力を発揮できるようになることがこの実践から見てきた。



準備運動



笑顔で鬼ごっこを楽しむB君



体育の学習でも使用しているビブスを使って追い掛ける人と逃げる人が分かりやすいようにしています。

(4) 成果と課題

生活場面の実践においては、授業で獲得した力を他の題材の授業場面、家庭、地域生活場面で応用することを目指して取り組んできた。具体的には、集団活動の中で、よさやもてる力を発揮できるように学部内教師間で授業ミーティングを行ったり、FSC（附養スポーツクラブ）の活動時間に教師がサポートに入り、学生ボランティアと働き掛けに関して有効な情報を提供したりし、授業実践と生活場面の実践をつなぐ取組において、保護者や関係機関の支援者にどのような情報を伝えたらいいのかわ見え始めてきたところである。生活場面への応用に関してはまだまだ課題があり、継続して取り組む必要がある。今後は、つなぎミーティングを活用し、関係機関とつないでいくことで授業実践と生活場面の実践を関連させる取組をさらに充実させたい。

7 まとめと今後の課題

中学部では、生徒が様々な場面でよさやもてる力を発揮するために、体育の授業を通して、授業づくり、学習環境や教師の働き掛けの手立て、有効な手立てを生活場面に応用するための工夫の在り方を追求してきた。前次研究において、K大学教育学部保健体育科教員から専門的な助言を受け、生徒の実態把握や指導内容、指導方法について検討を行った。今次研究で専門的な観点を学部内教師間で共有し、授業づくりに反映させ、機能させる必要があった。

以下に研究の成果と課題、まとめを示す。

(1) 成果と課題

① 授業づくりの成果と課題

【成果】

指導シートという支援のための道具を活用することで実態把握の観点を明確にし、授業ミーティングでVTR等を活用しながら教師間で意見を出し合い、生徒の実態を客観的にとらえることで、題材における一人一人のよさやもてる力と目標設定につながる課題を明確にすることができた。また、実態を踏まえた適切なグループ編成ができ、目標の設定が具体化され、手立ての設定も具体的に考えやすくなった。

運動技能の段階的な発達が図れるように、題材配列の変更や題材内容の見直しをすることができた。また、各題材での手立てを関連付けて考えることができるようになった。

【課題】

整理された授業づくりに継続して取り組む上で、授業分析の仕方や指導シート、運動プロフィール等のデータ化の工夫を行っていききたい。また、題材配列や指導内容の精選も行っていきたい。

② 学習環境と教師の働き掛けの成果と課題

【成果】

P-D-C-Aサイクルを踏まえた授業ミーティングを通して、一人一人の生徒にとって必要な支援について焦点化することができるようになってきた。

題材が変わっても、共有した方がよい支援ツールを含む学習環境や働き掛けについても少しずつ整理することができ始め、他の指導の形態においても共有の支援方法として活用することができ始めてきた。

学習環境が整理され、題材間で共有の支援を実践したことで、集団活動において生徒一人一人が見通しをもって活動しやすくなった。

教師の働き掛けも一人一人に応じたより具体的、必要最小限なものとなり、生徒が主体的に行動するとともによさやもてる力を発揮しやすくなった。

学習環境と教師の働き掛けを、相互に関連付けて考えることが手立てとして有効であることを教師間で確認することができた。

【課題】

学習環境、教師の働き掛けを活用しながら、それらの視点を整理・精選し、発展させたい。

生徒への有効な手立ての妥当性の検証を行うとともに、有効な手立てを他の指導領域、生活場面に広げたい。

③ 生活場面への応用の成果と課題

【成 果】

授業づくりで明らかになった有効な手立てを生活場面に応用する方向性を探ることができた。生活場面において、生徒がよさやもてる力を発揮して意欲的に取り組んだり、集団活動に参加することができ始めた。

【課 題】

生活場面への応用の工夫が十分に検証できなかった。学校側からの提案だけでなく、家庭や関係機関、ボランティアからの意見も十分に反映できる工夫を加え、継続して取り組んでいきたい。

(2) まとめ

以上の研究の成果と課題を受け、今後は、専門家の助言から得た実態把握の観点を生かした授業づくりに継続して取り組み、生徒の実態を客観的に分析できる方法を取り入れ、目標設定や手立て等を精選していくとともに、十分な検証ができなかった生活場面への応用についても深めていきたい。

引用・参考文献

- 独立行政法人 国立特殊教育総合研究所・世界保健機構(WHO) (2005) ICF活用の試み ジアース教育新社
- 鹿児島大学教育学部附属養護学校 研究紀要第13集(2001) 『一人一人の子供の将来の豊かな生活につながる教育課程の編成はどうあればよいか』—教育的ニーズの把握と指導内容・方法の整備—
- 鹿児島大学教育学部附属養護学校 研究紀要第14集(2003) 『一人一人の子供の現在及び将来の豊かな生活につながる授業づくり』—個別の指導計画の作成と活用を通して—
- 鹿児島大学教育学部附属養護学校 研究紀要第15集(2005) 『子どもの生活をつなぐ支援体制づくりをめざして』
- 金子明友・吉田茂・三木四郎(1996) 教師のための運動学 運動実践の理論 大修館書店
- 小池敏英・北島善夫(2001) 知的障害の心理学 発達支援からの理解 北大路書房
- 小貫悟・名越斉子・三和彩(2004) LD&ADHDへのソーシャルスキルトレーニング 日本文化科学社
- 文部省(1999) 盲学校、聾学校及び養護学校学習指導要領(平成11年3月)解説—各教科、道徳及び特別活動編—
- 埼玉大学教育学部附属養護学校 研究集録35(2006) 『つながりを大切にした授業づくり』—個別の教育支援計画を活かした授業づくり—